



🌻 「造形遊び」の原点を見た

小学校の図画工作は、表現と鑑賞領域で構成されています。表現においては、絵や立体、工作に表す造形活動が馴染み深いのですが、もう一つ「造形遊び」と呼ばれる大事な表現活動があります。

「造形遊び」は、作品をつくることが目的ではなく、材料や場所、環境条件などから思い付いたことを基に造形活動を次々と展開する表現活動です。低学年では空き箱や土、中・高学年では木切れや校庭の遊具、光、風などを材料とする表現活動があります。例えるなら、私が子供の頃には普通に遊んでいた「秘密基地づくり」のようなイメージです。昔は空き地や草むらがそこら中にあり、今のようにスマホやゲーム機もありませんでしたから、学校から帰ったら日が暮れるまで秘密基地をつくって遊んだものです。そういう自由な発想で創造的に遊ぶ機会が失われていることから、学校教育の中に「造形遊び」が取り入れられたという経緯があります。



さて本題です。校長室の窓の外から、大休憩や昼休憩に一年生が楽しそうに遊んでいる声が聞こえました。行ってみると、中庭の大きなツツジの木や芝、石のテーブルとベンチなどを使って一年生の女の子たちが自分たちの世界観をつくって一生懸命遊んでいました。木の実や葉っぱの色にもこだわりがあるようで、動物のご飯や焚火をイメージし

ていると教えてくれました。

こういう遊びこそ、「造形遊び」の原点だと思います。落ちていたり見つけたものを組み合わせ、形や色にこだわりながら想像を広げる、それは、先生から言われてやる活動ではなく子供たちが主体的に活動している姿そのものです。



子供たちは将来、必ず自立していく必要があります。今はただの遊びにしか見えない活動でも、目の前にある物事から、自分の力で何か新しいものをつくりだそうとする創造的な想像力は、小さい時のこうした経験によって培われるのではないかと考えています。

